

## 幼小接続期における自然との触れ合いと表現の芽生え —幼稚園年長児に対する植物仮装の実践から—

### Contact with Nature and the Beginning of Art Expression in Conjunctive Period Between Preschool and Elementary School — Plant Costume Practice for Kindergarten Final Year —

富田 晃\*・久保 琴枝\*\*

Akira TOMITA, Kotoe KUBO

キーワード：幼小接続 自然との触れ合い 表現の芽生え 造形遊び

#### 1. 着想

人類は、古くから自然物を身に飾ってきた。現存する人類最古の装飾品は、今から約7-10万年前につくられた貝のビーズである<sup>1)</sup>。人類は、貝を集めて穴を開け紐で繋げたものをネックレスなどにして楽しんだ。人類が、絵や彫刻といった芸術表現をはじめた約3-4万年前<sup>2)</sup>より、はるか以前のことである。貝のビーズを身につけはじめた頃の人類は、道具としては石斧や槍をもち、火を扱うが、まだ土器や言語はなかった。寒さのなか生き延びるために毛皮や草皮を身につけるとともに、生存には直接かかわらない装飾としても自然物を身につけて楽しんだ。我が身を飾ることは、「わたしが、今、生きている」という感覚を確かめることであり、自分はどうしたいのか、自分をどう見せたいか、という表現の芽生えをあらわしている。

世界には、自然物を全身にまとった神々がいる。季節の変わり目に人間界にやってきて幸福をもたらすとされる来訪神がそうである。日本では、秋田のナマハゲ、宮城の水かぶり、鹿児島のとシドン、トカラのボゼ、宮古島のパーントゥ、八重山のアカマタクロマタなどが知られる。ユネスコは2018年に日本の「来訪神：仮面・仮装の神々」を世界無形文化遺産に登録した。来訪神たちは、大概、藁やヤシなどの植物で身を包んでいる。植物で身を包んだ来訪神は、ニューギニアのトゥブアン、西アフリカのドゴン人の神々、中米カリブ海沿岸に住むガリフナ人のワリニなど、世界各地に伝わっている。また、ハンガリーのブショージャーラーシュやスイスのチェゲッテは植物ではないがやはり自然物の動物の毛で身をつつんだ来訪神である。いずれも文字によって制度化された大宗教が届きづかった地域に生き残った神である。自然物を身にまとった来訪神は、無文字社会から続く人間の自然に対する畏敬の念をあらわしたものであり、目にみえないものに形を与えるという芸術表現の原初的な在り様を示している。

本活動は、貝のビーズや来訪神にみられるような、自然物でわが身を飾るという、人間の原初的な表現に着想を得ている。旺盛な好奇心や探求心をもつ幼児期の感性は、五感と体全体を働かせて、自然と触れ合いながら表現に関わる経験を積み重ねることにより豊かになる。

#### 2. 目的と方法

幼稚園教育要領(平成29年)は、幼稚園教育の「ねらい及び内容」を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に分け、うち「環境」において自然との触れ合いの大切さについて、「表現」において、素材の、色や形、手触りなど感じながら、飾ったり、つくったりして表現することについて示している。また、同要領は、幼稚園教育の基本として「環境を通して行う教育」をうたい、「幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導を行うことが大切」としている。

\* 弘前大学教育学部美術教育講座

Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

\*\* 弘前大学教育学部附属幼稚園

Attached Kindergarten, Faculty of Education, Hirosaki University

遊びとは、それをする事自体が目的の活動である。幼児は、心と体を一つにして全身的に遊びに関わる事により資質・能力を高め成長していく。幼児は、大量の砂と出会うと、それを積み上げたり、丸めたり、掘ったりしながら、何かをつくったり、壊したりして遊ぶ。このような材料との出会いから始まる遊びを「造形遊び」という。造形遊びは、幼稚園ではなく小学校学習指導要領図画工作科の内容として示されている。

#### ○造形遊びをする

遊びにおいて、児童は、自ら身の回りの世界に進んで働きかけ、いろいろと手掛けながら、自分の思いを具体化するために必要な資質・能力を発揮している。そこには心と体を一つにして全身的に関わりながら、多様な試みを繰り返し、成長していく姿がある。このような遊びがもつ教育的な意義と能動的で創造的な性格に着目し、その特性を生かした造形活動が「造形遊びをする」の内容である。(中略) 学習活動としては、想像したことをかく、使うものをつくるなどの主題や内容をあらかじめ決めるものではなく、児童が材料や場所、空間などと出会い、それらに関わるなどして、自分で目的を見つけて発展させていくことになる。(中略)「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」のみならず、「学びに向かう力、人間性等」にも深く関わることである。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）図画工作編解説』 pp.26-27

造形遊びの特徴を整理すると次のようになる。

- 材料との出会いから始まる造形活動
- 過程を楽しむ活動
- 体全体を働かせる活動
- できたものではなく、活動を通して得られる全人格的な成長に価値をおく活動

砂遊びが、幼児の教育・保育に資する活動であるように、造形遊びは、子どもの発達段階に合わせてその内容を考慮すれば、小学校教育ばかりでなく、幼稚園教育にも十分に資するものとなるとともに、幼小間の連続性をもたらす。

こうした造形遊びの特色を生かしながら自然との触れ合いを取り入れたのが本活動である。自然物には、人工物にはない微細な色や形、触り心地やにおいがあり、それと直接触れ合うことは幼児の感性を豊かにする。そして同じ植物の花や葉がひとつひとつ色や形が違うように、命に一つとして同じものはなく、刻々と変化している。造形あそびに自然物を取り入れることにより、幼児は命のあり様に向き合うことになる。

本稿では、幼児期における自然との触れ合いと表現の芽生えのためにおこなった葉や花を身に飾る活動を扱う。それは自然物を材料とした造形遊びであり、具体的な方法は、洗濯ネットにハサミで切れ目をいれてつくったベストを子どもたちが着て、それに葉や花を刺して自らを飾るものである。ちょうど、秋の落葉シーズンにおこなったので題材名は「秋の自然あそび」としておく。幼児が、葉の色や形の面白さやに気付いたり、匂いを嗅いだりして自然と触れ合いながら、葉や花で自分の身を飾って楽しもうというものである。活動場所となった公園にはプラタナス、サクラ、トチノキの葉が色づいて落葉していた。また、公園の芝生帯には、開花時期が長期にわたるセイヨウタンポポの黄色い花が咲いていたり、綿毛になったりしていた。本活動を通しての総合的な指導が幼稚園の担任教師のもとにおこなわれた。

造形遊びとは、材料との出会いから手や体全体の感覚などを働かせておのずと始まる活動である。一方、子どもに限らずとも、人は、過去の成功体験を再現したがるものである。例えば、子どもを公園に連れてゆき、自由にすると、子どもは一目散にかつて楽しんだ遊具に向かう。子どもが新しい遊びをはじめするためには、遊びが生まれるきっかけを大人が準備することは有効である。ただし、あまり指示的になるべきではない。本活動では、担任による事前の声掛けや、当日の登園時に保育室に置かれたネットのベストなどによって、何か新しい遊びがはじまるという期待感を醸成するようにした。そして、活動の現場となる公園に到着すると担当教師によって新しい遊びがはじまるための最小限の方向性が示され、その後に展開される子どもの自由な活動を誘発するようにした。

### 3. 活動の様子

#### シーン①

**O**は、私（担任教師）と同じ葉を見つけて、差し込んでみる。「先生、こうやるの？」と見せに来る。「いいね、うんそうだよ。もっと飾る？」などと、褒めながら会話を楽しめるようにした。「だけどね、これが刺さらないんだよ。取れて来るんだよ。」と自分で刺し方を考えていた。2枚、3枚と刺していく。

そのそばで、**N**は「タンポポあった。」と嬉しそう。「ほんとだ。秋でも咲いてるね。」「うん、あそこにもあるよ。」と教えてくれた。「できない」と言いながらネットに差し込もうとしている。少し様子をみて難しそうだったので、「ここにやりたいの？」と手伝って差し込んであげた。嬉しそうに「ありがとう」と言って、次の物を探しに行く。

#### 行動の分析

- 教師の模倣
- 試行錯誤する
- 発見の喜び
- 共感の喜び
- 試行錯誤する
- 感謝の気持ち

#### シーン②

カメラを向けると、自然にポーズをとってくれる**M**。「先生、どお？」と見せてくれる。それぞれ、自分の洋服づくりに夢中になりだした。

- 見てほしい気持ち
- 熱中

#### シーン③

「これ見て。こうなってる。」と**O**。「えー、これなんかすごい。」「いっぱいいついてる。後ろは黒くてボツボツだよ。こっち（表）はきれいだけど。」「このところ、気持ち悪い。」と、**S**。気になった物を拾って、じっくり見つめる**O**。

- 興味・関心
- 気づき
- 感想
- 共感
- 観察

#### シーン④

**R**は、「先生、これキツネみたい。」と落ち葉を見せてくれた。私は「本当だね、キツネみたい。」と返す。「ここがとんがってて、耳。」「はははは、面白い。」と**R**らしい話しぶり。**R**の背中を見ると、2枚の大きな葉がついている。私が「後ろにもつけたの。どうやってやったの？」と聞くと、**R**は「お姉さんにやってもらった。」「天使の羽なの。」と嬉しそう。「天使の羽！ほんとだ、素敵だね。」と返した。**S**が私のそばにきて、「わたしも天使の羽にして！」と話す。先ほどの**R**との会話を見聞きして、自分もやってみたくなったのかなと思った。**S**が持ってきた大きな落ち葉を背中に差し込んであげると、「ありがとう。」と言ってにっこりした。

- 発見の喜び
- 見立て
- 嬉しさの共有
- よさの取り込み
- 感謝

#### シーン⑤

**T**は、タンポポの綿毛の茎を長く摘み取り、上から差し込んでいた。また、タンポポの花は茎がやや短く下から差し込んでいたが、波縫いのように、刺したら再び出していた。「こうやると、とれないんだよ。」と教えてくれた。

- 工夫

#### シーン⑥

**K**は、いろいろな落ち葉をたくさん張り付けていた。「**K**ちゃん、いっぱいつけたね。」と声をかけると、「うん、あのね、これはね、これが**K**、これが〇〇（弟）、これが〇〇（妹）なの。」と話す。「**K**ちゃんの弟と妹も付けたんだね。」と話す。「うん、あと、パパとママもつけるんだ。」と話して、それに合う落ち葉を探しに行った。しばらくして、「先生、できたよ。これがパパで、これがママなの。」と見せてくれた。「家族全員集まったね。**K**ちゃんは、家族が大好きなんだね。」と返すと、「うん、あっ、先生も付けるよ。あと友達も付けよう。」と話しながら次々と落ち葉を足していった。「嬉しいな。ありがとう。友達は誰のことかな？」と聞くと、「うん、友達。」という返事。**K**にとっては、自分の周りにいる大好きな人たちを集めて喜んでいたのであるかと思った。

- 見立て・物語化

## シーン⑦

**A**と**N**は、タンポポだけを集めて取り付けていた。普段、草花を集めておしゃべりしたり、ままごとをしたりして遊ぶことが好きな二人である。この日は、落ち葉がたくさん落ちてい  
る中、きれいに咲いていたタンポポをたくさん見つけて、それだけを飾り付けていた。正面  
全体に広がるように付けていた。「わあ、**A**ちゃんと**N**ちゃんはタンポポだけを集めたんだ  
ね。かわいいね。」と声をかけると、ニコニコ顔の二人。ポーズをとって写真を撮らせてく  
れた。あとで落ち葉も1、2枚加わっていた。2人で同じような物を選んで、ペアルックの  
ようにしたのかな?と思った。

- 仲良しグループ  
の共同作業
- 気に入ったものを  
たくさんあつめる

## シーン⑧

**U**は、「こんな大きいのもあった。」と大きな枝を見つけて持っていた。「この葉っぱの裏、  
ほら、ふわふわしてるんだよ。」と話す。周りにいた数名の子たちも同じ葉を見つけて「ふ  
わふわする。」「もふもふだね。」「あっちにいっぱいあったよ。」などと嬉しそうに話していた。

- 触覚を楽しむ

## シーン⑨

**E**が、2枚の葉を一つずつ両手に持ち、帽子の上当てて「せんせーい」と見せてくれた。  
「耳?ウサギかな?」と聞くと、「うん、ウサギだよ。」とにっこりして嬉しそう。「ウサギに  
変身したね。」と返した。その様子を見ていた**U**も持っていた枝から2枚葉っぱを取って、  
帽子の上当て「先生、ネコだよ。」と話す。友達の楽しそうな様子をみて真似て楽しんで  
いた。

- 動物見立て

## シーン⑩

**T**は、大きめの落ち葉に重ねるようにタンポポや小さな花を組み合わせ、一つのコサー  
ージュのように作っていたのには驚いた。

- 表現様式の発見

## シーン⑪

30分ほど活動をしたのちいつもの公園散歩のように遊具あそびをした。**U**は、みんなが  
ベストを脱いで遊具に遊びに行っても、一人でさらに落ち葉をベストに飾って続きをやって  
いた。公園から幼稚園へ帰ってくる道中、落ち葉が集まっている道の端を歩いていた**T**は、  
「なんか面白い。」とズックで踏みしめたり、落ち葉を軽く蹴ったりしていた。周りにいた子  
たちも「ふかふかだ。」「布団みたい。」と真似っこしていた。

- 余韻を楽しむ

保育室に戻って来て、**K**は、「先生、私の手いいにおいがする。葉っぱのにおいかな?」  
と教えてくれた。**I**は、「この葉っぱ美味しいにおいがする。何だろう、グミかな?」と話し、  
**K**と一緒ににおいを確かめていた。

- 匂いを感じる

## 4. 考察

## シーン①

本活動のねらいは、自然との触れ合いと表現の芽生えであり、技術の獲得ではない。一方、ベストのネッ  
トに、葉柄(葉と茎をつなぐ柄の部分)を差し込むのは、幼児にとって難易度の高い作業だったようで、な  
かなか思うようにいかない子どもたちがいた。本活動の同種の教材として、ビニール袋をベストにしてそれ  
に両面テープを貼りつけて、さらに植物を張り付ける活動が、すでに知られているが、本活動では、ビニール  
やテープがもつ人工的な素材感を避けるために、洗濯用ネットを用いた。幼児が容易に葉や花をつけられる  
方法については、今後の改善課題である。本活動では、葉や花をうまく差し込めない子どもたちは思考錯誤

をしながら、お友達や教師に手伝ってもらったり、つけ方を教えてもらったりして活動をすすめた。これは教材開発者が意図したことではないが結果的には、工夫したり、人間関係を豊かにしたりする契機になった。

子どもたちは、まず、落葉した葉に興味を寄せるものと想定していた。一方、実際には、黄色く咲いていたタンポポを見つけて喜んでいた子どもたちがいた。造形遊びで大切なことは、何か目的にむかって直線的に進むことではなく、素材などをきっかけに、子どもが自らの遊びを展開することである。子どもが、想定外のタンポポに興味をもったのは、想定外の要素を多分に有する屋外の公園という環境によるものであり、そのことによって事前の想定を超えた自然の多様性に出会うことができた。

#### シーン②

自ら飾った葉が目立つようにカメラにポーズをとる子どもには、自分がつくったものを見せたいという思いと、自分を見せたいという思いとが、共存している。自らの身体に植物を飾ることは、自らをどう見せたいか、という身体装飾的な意味があり、貝のビーズや来訪神に通じる原初的な人間の表現意欲に結びついている。

#### シーン③

何種類かの樹種の葉を手にとり、その違いを観察するO。その様子を見たSが、葉っぱの特徴を言葉にしたことから、Oの葉っぱへの興味はさらに増していった。このように、気づいたことや思ったことを言葉にして友達と共有することによって、学びの共同体が形成され、さらなる気づきや思いに発展していく様子が見られた。

#### シーン④

拾ってきた葉っぱをキツネの顔に見立てて楽しんだR。見立てとは、人間の想像力によって実在しないもののあるように思い描くことである。植物の葉は、樹種によって特徴的な形をしているとともに、同じ樹種、同じ個体の葉であっても、まったく同じ形のものではなく、一枚一枚微妙に異なる。Rは、プラタナスの葉のなかでも、特にキツネの顔に見える形の葉っぱを見つけだしていた。微細な形の違いを感じとる能力は、無限の多様性をもつ自然とのかかわりから得られる感性である。

Rの背中に付いていた二枚の大きな葉っぱは、当日観察者として参加した学生と天使ごっこをしながらつけてもらったものである。Rを見ていたSは、「わたしも天使の羽にして」と教師に言い、教師がSの背中に葉っぱをつけると、Sは感謝を伝えた。このように、葉っぱを天使の羽に見立てることにより、子どもの想像力、コミュニケーション力、社会性が駆使された遊びが展開された。

#### シーン⑤

担当教師は、最初、落ち葉をつけるように子どもたちに伝えたが、Tは、タンポポの綿毛をベストに差し込んでいた。Tは、タンポポの綿毛に、不思議さや面白さを感じたのだろう。このように、授業者の想定外の活動であっても、子どもが新しい何かを見つけたり、生み出したりすることが、造形遊びの醍醐味である。またベストへの差し込み方を落ちにくくするための工夫が施され、創造性が発揮されていた。

#### シーン⑥

本活動をおこなった5歳児とは、幼児画・児童画の発展段階に当てはめると、画面の中にテーマをもった一つの世界を生み出し、自分と人や物との関係を描く「図式期前期」にあたる。Kは、プラタナスの葉を、自分と自分の家族に見立て、小さめの葉を弟や妹に、大きめ葉を両親にというように、葉の大きさ手掛かりに使う葉を選び、自分に見立てた葉の周りに家族に見立てた葉を配置していた。このように想像力を働かせながら空間づくりをすることは絵画表現や空間表現の芽生えといえよう。

#### シーン⑦

本活動では、同じ幼児が、教師とお話ししていたかと思うと、一人になっていたりと、そのうちにお友達と

合流していたりと、人間関係を柔軟に変化させていた。また、普段から仲良しのAとNは、互いに共感しながら同じ活動をしていた。本活動の主なめあては自然との触れ合いと表現の芽生えであるが、人間関係をふくむ全人格的な成長の機会となった。

#### シーン⑧

自然物には、色と形があるだけでなく、肌触りがあり、匂いがあり、舌にのせれば味があり、叩いたり擦ったりすれば音がする。そして、それらは時間とともに刻々と変化している。トチノキの葉は、表側は滑らかだが、裏側にはたくさんの毛があり、やわらかな触感がある。Uは、その触感を「ふわふわ」と言葉にあらわし、別の子は「もふもふ」という。物事の状態や動きなどを音で象徴的に表した語をオノマトペという。オノマトペは体験を通じて習得される。とくに、「ふわふわ」や「もふもふ」といった触覚と結びついたオノマトペは、触覚だけでなく、視覚的にも結びついた実体験として身体に記憶される。一方、現代の子どもが得る体験の多くが、テレビやコンピュータ・ゲームなどの実体験を伴わない仮想的なものに占められつつある。本活動で、子どもたちが、実際に、自然物を見て、触わり、匂いを嗅いだりするなどして五感全体をもって味わった体験は、いくつかのオノマトペとともに身体に記憶されたことだろう。

#### シーン⑨

両手に葉っぱをもち、手を頭の上に持ち上げて「ウサギだよ」というE。こうした身体の動きをともなった模倣表現は、ダンスや演劇といったパフォーマンス・アートの芽生えである。模倣とは、対象に関わろうとすることであり、人間の学習に必要な最も基本的な能力である。Eは、幼稚園で飼育しているウサギに愛着心をもっているのだろう。その後、Eの様子を見ていたUは、Eと同じように葉っぱを持った両手を頭の上に持ち上げた後に、「ネコだよ」という。UはEへの模倣を通じてEとの一体感を得るとともに、アレンジを加えることにより自分という個性を打ち立て、「わたしが、今、ここに生きている」という感覚を確認する表現をおこなったのである。

#### シーン⑩

タンポポの綿毛をみつけてきたり、落ちにくくするための工夫をしたりしていたT。授業者の想定を超えて、落ち葉や花を組み合わせてコサージュのようなものを作り創造性を豊かに発揮していた。

#### シーン⑪

活動後、ほかの子どもたちが遊具で遊ぶなか、活動の続きをするU。自らの意志で「今」を作り出すことは、個性ある人間性を形成する。公園から幼稚園への帰り道で、道端の落ち葉を、軽くけったりしながら、触感を楽しむT。そして、手に残る葉っぱの匂いを確かめるIとK。活動時間を終えても活動の余韻を楽しむことにより、活動内容が子どもたちに定着する。

### 5. まとめ

本活動は、貝のビーズや来訪神にみられるような、自然物でわが身を飾るといふ、人間の原初的な表現に着想を得るとともに、小学校図画工作科の「造形遊び」につながる幼小接続期の教材として構想された。秋の公園を活動場所にした本活動では、子どもたちは、落ち葉や花を見つけて、触ったり、匂いを嗅いだりと五感を通じて味わった。全身を使い五感を通じて自然と触れ合うことは、自然界の一部である人間の基本的な感性を育てる。そして、子どもたちは、葉や花から不思議さ、面白さ、美しさなどを感じながら、特徴を発見して、気づいたことを言葉にして友達や教師と共感した。感動は、共有し、伝え合うことで、より深いものとなって人の記憶に蓄えられる。また、子どもたちは、好きな葉や花を選びとった。快／不快、好き／嫌いという感情を働かせながらの選択は、自分はいかにありたいかという、個としての主体性を育てる。子どもたちは、想像力を働かせて心象のイメージを膨らませて、葉や花を自分の好きな動物や自分の大事な人に見立てた。そして、見立てたものを、集めて、並べることによって世界観をつくり出しながら自らを飾った。つまり、本活動を通じて、子どもたちは、「感じる」「気づく」「選ぶ」「集める」「見立てる」「飾る」「配

置する」そして「伝え合う」ことを重ねながら、自然と深くかかわり、想像力を働かせて、「わたしが、今、生きている」という感覚を確かめていたのだ。「わたしが、今、生きている」という感覚を確認することを「表現」とするならば、本活動は、表現の源泉に直結したものであり、絵画、彫刻、演劇、ダンスなど、さまざまな表現様式への発展につながるものといえよう。無論、本活動の意味は狭く「表現」だけにあるわけではなく、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」を含めた子どもの全人格的成長につながるものである。

門脇誠二「世界最古のビーズ」『ビーズ：つなぐ かざる みせる』国立民族学博物館, 2017

文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編」(平成29年)

文部科学省「幼稚園教育要領」(平成29年)

山成昭世「図画工作科の「造形遊び」につなげる題材—身近な材料や自然物を使った「造形遊び」の事例—」

京都聖母女学院短期大学研究紀要, 47, pp.35-44, 2018

- 1) 現存する人類最古の装飾品は貝のビーズであり、南アフリカのブロンボス洞窟から出土した約7万5000年前のもの、イスラエルのスファール洞窟から出土した約10万年前のもの、アルジェリアのオウエド・デジェバナ遺跡から出土した約10万年前のものがある。(門脇, 2017)
- 2) 絵や彫刻の発生は、今から4万2千年前から3万2千年前にヨーロッパ南部で栄えたオーリニャック文化にあると考えられている。ラスコー(フランス)、アルタ・ミラ(スペイン)の動物壁画や、ヴィレンドルフ(オーストリア)のヴィーナス像、シュターデル(ドイツ)のライオン像などが有名である。

世界各地の来訪神



宮城の水かぶり



宮古島のパーントゥ



ニューギニアのトゥブアン



スイスのチェゲッテ

活動の様子



シーン①



シーン②



シーン③



シーン③



シーン④



シーン④



シーン⑤



シーン⑥



シーン⑦



シーン⑧



シーン⑨



シーン⑩